令和４年３月２５日

令和３年度 学校経営報告

東京都立成瀬高等学校長
髙野 修一

Ⅰ　今年度の取組と自己評価

１　教育活動への取組と自己評価

⑴ 学習指導

① 授業力向上を図るため、教員同士の相互授業参観を推奨した。コロナ対応やオンライン学習等で多忙なため、全教員４回以上実施することはできなかった。昨年度参加していない教員を中心に、予備校主催の教員向け授業力向上セミナーに参加させた。生徒による授業評価の結果を教科に周知して、授業改善につなげる検討材料として提供している。しかしながら、分散登校や健康チェックや消毒作業等が入るなど、こうした作業の追加や変則的な授業形態に対応することで教員もかなりの労力を割かれ、授業改善に充分に取り組めたとは言いがたい１年間であった。来年度も、こうした状況が完全に払拭されることはないと予想されるなか、授業改善にいかに取り組んでいくかが今後の課題である。

② 「英語教育推進校」としてＪＥＴ２名を最大限活用し、英語４技能の力を伸ばす指導に取り組んだ。１年生の英語外部試験（ＧＴＥＣ）の結果は、昨年度の６８４点から７１４点へと大きく伸ばすことができた。

③ 「総合的な探究の時間」実施３年目であったが、「探究研修部」の企画・運営により、分掌を中心にして円滑に実施することができた。特に１学年探究を「チームプロジェクト」として位置づけ、すべて外部機関との連携で実施する「７つのプロジェクト」として編成した。外部との連絡・調整等に多大な労力が必要であったが、生徒の振り返りでも高評価を得る取組となった。今年度の知見と反省を活かし、２学年の「マイプロジェクト」、３学年の「フューチャープロジェクト」をさらに活性化させていく。

④ 学校としての組織的な生徒による授業評価は、年２回実施した。教員各々が、生徒による授業評価を真摯に受け止め、学びの質の向上に努める必要がある。オンライン学習のスキルアップも含め、今後の自己研鑽に期待している。

⑤ 進学指導研究校として、指導部の助言等を受けながら模試分析会を年間３回実施した。次年度以降も、進学指導研究校として、指導教諭の模範授業等に参加させながら、学校全体の教育力を向上させ、生徒の学力の向上を図り、自己実現につなげていく。なお、「成瀬高の３年間の進路指導」として、１年生から３年生までの「自己実現ストーリー」生徒編と教員編を完成させた。

⑵ 進路指導

① 大学入試関連の情報発信が、「進路指導部より」という校内ポスター形式の進路だよりとして、昨年より充実した形で頻繁に発信された。今後は、ＨＰなどを活用した生徒のみならず保護者への情報発信が課題である。

② 新型コロナウィルスの感染拡大を受け、保護者会が思うように実施できない状況で、生徒・ 保護者向けの進路講演会や研修会の機会は充分に確保できなかった。また、大学一日体験入学や学部学科ガイダンスなど、年度前半に生徒を対象として計画していた進路行事は悉く中止を余儀なくされた。特に１学年は、大学受験に向かう意識付けや学習習慣の確立を計画どおりに実施できない状況下であったが、学年集会や進路通信等を活用して、生徒・保護者の意識の向上を図った。

③ コロナ禍の状況下であったが、２学期から３学期にかけて、１・２年生の生徒及び保護者に対して、オンラインと対面を併用した予備校と連携した進路講演会を実施できたことは、今後の進路指導の契機としていきたい。

④ 長期休業中に、講習・補習を計画的に実施した。講習数も昨年の５１講座から７７講座へと増加し、

生徒の学力保証につながり、上位層の増加に寄与することができた。

⑤ 英語教育推進校として３年目となり、ＪＥＴ２名体制の効果が着実に出てきた。１年生の英語外部試験（ＧＴＥＣ）の結果は、昨年度の６８４点から７１４点へと大きく伸ばすことができた。また、外部模擬試験の結果からも、英語成績の上位層の数は着実に増えてきた。

⑶ 生活指導

① 遅刻回数は、学年により差が大きく、生活指導部が主体となり、学校全体で統一した指導体制の確立が急務である。

② 今年度も、通常の美化活動に加えて、コロナ感染症対応のための校内消毒という作業が必要になったが、保健部主導できめ細かい対応を行い、感染防止対策の徹底を図ることができた。

③ コロナ禍で、１人で過ごす時間が多かったからか、ＳＮＳに関する問題が発生した。しかしながら、こうした事態にも生活指導部と学年が連携し、迅速かつ適切に対応し、生徒を支えることができた。

④ 今年度より「自転車安全運転指導推進校」の指定を受け、スケアードストレートを実施し、交通事故の未然防止に努めた。また、町田警察署と町田市役所と連携して、朝の交通安全キャンペーンを学期ごとに実施し、交通事故防止の啓発を行った。ヘルメット着用については、推進の活動を行ったが、着用率はとても低い。今後、どのようにして着用率を向上させるかが、今後の大きな課題である。

⑷ 特別活動

① 今年度も、コロナ禍により、学校行事の縮小・中止を余儀なくされ、生徒の学校への帰属意識を育み、良好な人間関係を築くということが難しかった。ホームルーム活動、生徒会活動、部活動等でも制約の多い１年となり、それらを通して身に付けさせるべき生徒の能力の育成は十分にできたとはいえない。しかし、そのような環境の中で生活指導部が中心となり、学年別で体育祭や文化発表会を苦労しながら工夫をして実施できたこと大きな成果であった。

② オリンピアンの講演会を実施し、有意義なオリンピック・パラリンピック教育を実施できた。

③ コロナ禍により、台湾修学旅行、オーストラリア研修旅行、台湾留学生の長期受け入れ等はできなかったが、オンラインを活用した国際理解・異文化理解教育は４回実施できた。

⑸ 健康づくりの推進

① 今年度は、新型コロナウィルスの感染防止対策を徹底指導することが健康づくりの指導の根幹となったが、学校関係者が感染することも少なくなかった。

② スクールカウンセラー及び保健部・担任を中心とした相談体制はとてもよく機能している。年間２回行う拡大教育相談委員会は、全教員悉皆にしており、生徒情報を確実に共有している。また、保健部を中心に、高校生のメンタルヘルスに関するオンライン研修も受講している。

⑹ 学校運営

① グランドデザインに基づく、学校として育てたい資質・能力及び各教科のルーブリック評価を策定し、観点別評価に向けての準備を推進した。今後は、新学習指導要領が始動する新１学年から、いかに観点別評価を運用していくかが課題である。

② 授業の一部にでもオンラインを取り入れた授業実践が急速に進むのと同時に、対面授業の良さが改めてクローズアップされ、それぞれのメリット・デメリットを活かしながら授業を実施していこうとする教員の意識改革は大いに進んだ。

③ 探究研修部主導による「総合的な探究の時間」は、コロナ禍により実施できない活動があるなど様々な困難はあったものの、１・２学年とも素晴らしい成果発表会を実施できた。次年度はこの成果を活かし、さらなる改善に向けて取り組んでいくことが課題である。

④「理数研究校」としての取組は、コロナ禍で大きく制限された。オンランを有効に活用し、講演会等を行った。理数分野に関する興味・関心を喚起させ、進路希望の選択肢を広げさせたい。

⑤「海外学校間交流推進校」としてコロナ禍の影響で３月になって実施した「国際交流研修」は、生徒達にとって本年度唯一の国際交流企画となり、参加した生徒達は非常に充実したものとなった。今後、次年度もコロナ禍の影響が続きオーストラリア研修が中止になるような場合には、本年度実施した「国

際交流研修」を継続していことも視野に入れる。

⑥ 経営企画室との連携・協力体制も確立している。物品の購入、施設の管理、窓口業務をはじめ、入学選抜業務など、経営企画室の協力的な対応のおかげで学校経営が円滑に進行した。

⑦ 今年度は、コロナ禍の影響で、夏季休業中の講習優先期間等を設定できなかったが、逆に部活動が禁止された期間も相当あったため、部活動で在校時間が長くなっている教員等はその総時間数は減った。平常の学校に近づきつつあるなかで、再度ライフ・ワーク・バランスへの取組を推進できるよう意識改革を行っていく。

(7) 地域連携

① コロナ禍で、ボランティア体験活動や家庭科での保育園・幼稚園実習はすべて実現不可能だった。

② コロナ禍で、学校開放事業、避難所連絡会等の地域連携活動はすべて中止となった。

(8) 募集広報活動

① 東京都指定４事業に「総合的な探究の時間」を加えた５本の柱を学校の特色の中心に据えて学校広報・生徒募集活動を推進し、推薦選抜は２．１５倍　、学力選抜は１．２８倍となり、都立高全体が応募倍率を下げているなか、ほぼ昨年度並みの倍率を維持することができた。

②ホームページの充実を図り、学校の教育活動や生徒の活躍を発信するとともに、ＰＴＡメール等も有効に活用し、広報活動の充実を図った。

ア　校長通信を随時発行し、学校の教育活動に対する保護者の理解と協力を得るとともに、これから入学を目指す中学生保護者などへの学校理解にもつなげるよう取り組んだ。

イ　生徒の活躍を学校外にも広く知らしめるため、部活度の様子や、探究活動の様子、英語教育推進校、理数研究校、海外学校間交流推進校としての活動の様子などを、積極的に発信した。

ウ　今年度、ＨＰに「地域の方向けのバナー」を作成し、地域への情報発信など地域との連携を深めた。

エ　来年度は新ＨＰへと移行するため、新ＨＰを活用した募集広報活動を展開していきたい。

２　重点目標への取組と自己評価：本年度の数値

(1) 生徒の学校満足度：１年生８５．０％、２年生７１．２％、３年生７８．７％
保護者の満足度: ７８．７％

(2) 家庭学習時間：　１学年：3時間以上1.5%、2～3時間9.2%、1～2時間38.5%、1時間未満50.9%
２学年：3時間以上12.0%、2～3時間16.8%、1～2時間35.6%、1時間未満35.6%
３学年：3時間以上58.8%、2～3時間16.0%、1～2時間15.6%、1時間未満9.7%

(3) 夏期講習：４６講座（３学年）、８講座（２学年）、７講座（１学年）　延べ９４６名
冬期講習：１６講座　延べ６８名

(4) 共通テスト：受験者数２５４名

(5) 国公立大学現役合格者数４名

(6) 難関私立大学現役合格者数：早慶上理１１名、ＧＭＡＲＣＨ現役合格者数９３名

(7) 全体模試分析報告会３回

(8) 服務研修以外の校内研修８回（生徒情報交換会２回、デジタル教育推進研修１回、教育課程研修１回、英語教育推進研修１回、校務支援システム研修１回、観点別評価研修２回）

(9) １・２学年での部活動加入率８５．５％

(10) 国際理解教育に関する行事（特別活動）
①外務省との連携講演会１回（マレーシア大使館）
②留学生受入：予定していたものはすべて中止
③オンラインによる国際交流実施（４回）
④オーストラリア海外研修代替行事：国内国際交流研修〔参加予定者２７名〕

(11) ウェブサイト更新回数　年間４５０回

(12) 学校説明会・見学会等参加数延べ　３１２６人

【数値に関する概観】

(1) ３学年（４２期生）については、学校に自分なりの居場所を見つけたり、受験に向けて一心に取り組んだりすることで、それに寄与した学校に対して一定以上の評価をしたことが伺える。２学年（４３期生）で値が下がっているが、これは、ひとえに修学旅行が延期になった末、日帰りのバスツアーに代替されたこと、文化祭など、本来であれば２学年が学校の中心となっていたはずの行事が展示中心の発表会になったことなどに起因している。
今後は、感染防止対策を徹底したうえでできる限りの行事の実施など、全校生徒の学校への帰属意識を高められるような取組を、教職員一同工夫しながら行っていく必要がある。

(2) ３学年になると約６割の生徒が３時間以上家庭学習しているが、１年生においては、約半数が１時間未満の家庭学習時間である。今後は、自学自習の定着に向けてその重要性を説き、学習の進め方も含めた指導が必要である。

(3) 夏季休業期間が他校より、１週間短い中、３年生の４６講座は、受験生の支援が十分に行えたと考察している。１，２年生の講座数の増加が今後の課題である。

(4) の受験者については、目標人数を多少下回った。これは、今年度は公務員を含んだ就職者例年にくらべ多かったことによる。コロナ禍で進路も多様化しており、昨年度との比較は単純にはできない状況下の中で、多くの生徒は指導に従いよく努力を重ねた。

(5) の国公立大学については、目標とした合格者数は達成できなかったが、早慶上理とＧＭＡＲＣＨが昨年度から倍増したのは大きな成果であった。「最後まで自分の目標を諦めずに粘り強く頑張り抜く」という指導が現実の事象として現れてきており、次年度以降の進路指導に大きく期待できる結果となった。

(6) コロナ禍及び家庭の経済的状況から、指定校・学校推薦・総合型選抜等で進路を決定する傾向がある。確かな学力を身につけさせ、一般受験で受験させる指導の充実を図る。

(7) 進学指導研究校として、教育庁指導部のアドバイスを受けながら、模試分析会を実施した。今後は進路指導部を中心とした生徒の高い進路志望を実現できる組織的な体制をより強固なものにして、進学指導研究校として恥じない成果を上げる必要がある。

(8) 英語教育推進の校内研修は、外部講師を招いて、対面で実施することができた。また、全教員悉皆で行っている生徒情報交換会は、各回ともスクールカウンセラーを招いて充実した研修会となっている。そのほか、 デジタル教育推進研修１回、教育課程研修１回、校務支援システム研修１回、観点別評価研修２回など、新教育課程導入や総合型校務支援システム導入に向けて、時機に応じた研修を実施できた。

(9) コロナ禍で１年生の入部勧誘が例年どおり行えなかったことを考えれば、ホームページの活用などで部活の魅力紹介を行ったことなどが好影響を及ぼした結果である。

(10) については、コロナ禍で致し方ない。感染拡大の間隙を縫って、わずかな数でも実施できた活動があっただけよかったと前向きに捉えて次年度につなぎたい。

(11) 広報部を中心に意欲的に取り組んでいる。コロナ禍での生徒・保護者への連絡、本校の教育活動への理解と学校広報に大きく寄与した。

(12) コロナ禍で人を集めてはいけないという制約があるなか、オンライン説明会や午前・午後に分けての実施など、工夫に工夫を重ねて何とか実施した結果である。次年度もコロナ禍が続く場合には、今年度の経験と反省を活かして来校者数増加を図っていく必要がある。

Ⅱ　次年度以降の課題と対応策

１　確かな学力の育成

(1) **「進学指導研究校」**、「英語教育研究推進校」、「理数研究校」、「海外学校間交流推進校」、「自転車安全運転指導推進校」の教育委員会事業等を積極的に活用し、教員の教科指導力の向上とともに、生徒の学力向上を組織的に図る。

(2) 定期考査・模擬試験等の教科による結果分析を丁寧に実施し、教科主任会等を活用した組織的な授業改善を推進する。

(3) 「総合的な探究の時間」を全教職員一丸となって推進し、生徒がこれからの社会で必要とされる資質・能力を全ての教育活動を通じて育成する。

⑷　新教育課程実施に際して、検証をしながら観点別評価などを実施していく。

２　進学実績の向上

⑴ 進路指導部を軸とした組織的な進学指導体制の構築を図り、模試分析会の確実な実施により進学実績の向上を図る。

⑵ 学年集会等を積極的に活用し、進路実現において教員間の指導力の差をできる限りなくし、担任７人で２８０人の進路指導、生活指導を行うという学校の姿勢を生徒一人ひとりに理解させ、学校に対する信頼感を醸成させて、個別面談の効果を高め、保護者等からの期待に応えうる進学指導を実施する。

⑶ 国際際理解教育と英語教育の充実を図り、理系・文系どちらにも必須の英語学力の向上を目指し、大学進学実績の向上につなげる。

３　生活規律の向上

⑴ 遅刻防止や服装指導等、学校生活の規律を遵守させる指導はもとより、自転車の乗り方指導など公共のルールを守る指導を組織的に行う。

⑵ コロナ禍で学校に来ること自体への不安感を抱いたり、人間関係の構築がうまくできない生徒等に対して、該当学年だけでなく、保健部、生徒指導部、教科等、学校がもてる力を最大限に活用して組織的に対応し、困難な状況を乗り越えていく。

４　学校の特色化とその共有

「進学指導研究校」「英語教育研究推進校」、「理数研究校」、「海外学校間交流推進校」、「総合的な探究の時間」、「自転車安全運転指導推進校」を学校の特色として前面に打ち出し、これらの事業を軸として教育活動を展開するとともに、学校広報の推進を図る。